



北海道公立大学法人  
**札幌医科大学**  
Sapporo Medical University

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title 論文題目	小児がんフォローアップ外来における退院後早期の小児がん経験者と家族への看護師のかかわり
Author(s) 著者	吉本, 康子
Degree number 学位記番号	第83号
Degree name 学位の種別	修士 (看護学)
Issue Date 学位取得年月日	2013-09-30
Original Article 原著論文	
Doc URL	
DOI	
Resource Version	吉本, 康子

## 修士論文の内容の要旨

保健医療学研究科 博士課程前期 看護学専攻 専門看護師コース 小児看護分野	学籍番号 11MN-03 氏名 吉本 康子
論文題名 (日本語) 小児がんフォローアップ外来における 退院後早期の小児がん経験者と家族への看護師のかかわり	
論文題名 (英語) Nursing for childhood cancer survivors and their families in the early post-discharge period at outpatient follow-up clinics for childhood cancer in local hospitals	
〔背景〕 北海道は広大な土地であり、小児がん治療を行う病院は都市に集中している。地方に在住する小児がん経験者は地元から離れて治療を受け、退院後は地元に近い病院でフォローアップを受けることになる。しかし、北海道では、小児がんの入院治療を行う病院の看護師と、退院後フォローアップを行う病院の看護師間の情報連携はほとんど行われていない。そこで、小児がんフォローアップ外来における退院後早期の小児がん経験者と家族への看護師のかかわりを明らかにすることを目的とし、本研究を行うこととした。	
〔方法〕 対象者は通院開始 3 ヶ月以内の小児がん経験者・家族とかかわったことのある外来看護師 5 名である。彼らは北海道内の小児がんを治療する病院とは異なる、フォローアップ外来のある病院 4 施設に勤務していた。対象者に小児がん経験者・家族へのかかわりに関するインタビューを実施した。分析はインタビュー結果を逐語録とし、内容をサブカテゴリー、カテゴリー化し抽象度を高め、質的帰納的に行なった。分析は担当教員からスーパーバイズを受け、信憑性を高めた。	
〔結果〕 対象者は看護師経験 5-30 年であり、小児がんフォローアップ外来専任の看護師がいる施設は 2 施設であった。地元の病院の外来看護師は、【情報が少ないため、小児がん経験者・家族のことがわからない】状況で小児がん経験者・家族と接していた。そこで、【必要な対応を通して小児がん経験者・家族との接点を持つ】ことから、【小児がん経験者・家族に関する情報収集を継続する】が、通	

院早期の小児がん経験者・家族とのコミュニケーションは取りにくく【小児がん経験者・家族と話したくても話せない】状況であった。そして、【小児がん経験者・家族ともっと話がしたい】と考えていた。一方で、【小児がん経験者・家族と上手く話ができないのは仕方がない】と考え、【小児がん経験者・家族と問題が起こらないように控えめに対応する】ようになっていた。外来看護師は、【ヘルスアセスメントを通して小児がん経験者・家族の理解を目指す】ことから、小児がんのフォローアップに必要な看護に気づいていた。

〔考察〕

小児がん経験者には長期的な支援が必要であり、継続看護が重要になる。しかし、地元の病院の外来では退院後早期の小児がん経験者・家族に関する情報が不足しており、外来看護師は小児がん経験者・家族とゼロから人間関係を作りながら必要な看護に気づいていた。病院間の看護師同士の小児がん経験者に関する情報交換等の連携がないことは、地元の病院で継続看護が行いにくい状況であった。今後は病院間の看護師同士が、情報交換や小児がんについて学び合うなどの連携を行い、地元に戻る小児がん経験者・家族のQOL維持・向上につなげることが望まれた。

〔キーワード〕

小児がん、長期フォローアップ、外来看護師、小児がん経験者、継続看護

[Background]

Hospitals that are equipped to treat children with childhood cancer are concentrated in urban areas in Hokkaido. For this reason, childhood cancer patients from rural areas are often sent to a hospital in an urban area for intensive treatment. Once their intensive treatment is completed, they are discharged to a local hospital near their home to continue follow-up treatment. In Hokkaido, there is a lack of the close contact necessary to deliver comprehensive follow-up services for children between the nurses in urban hospitals and rural hospitals. This study is designed to clarify the current services for childhood cancer survivors (CCSs) provided by nurses at local follow-up outpatient clinics in rural areas.

[Method]

Five outpatient nurses who were involved in the treatment of CCSs who had been newly discharged from specialty hospitals within three months were enrolled. They work at four different local hospitals respectively. The author conducted interviews with them about nursing for CCSs and their families. Questions regarding their practice for CCSs and their families were asked in face-to-face interviews. The interviews were recorded and the data then classified into several abstract categories and subcategories based on

an inductive method. To ensure the credibility of this process, a nursing professor experienced in qualitative research supervised the process of data analysis.

[Result]

The participants' years of nursing experiences ranged from 5 to 30 years. 2 of 5 participants were nurses specializing in childhood cancer, and they were in charge of providing follow-up services at their hospitals. Nurses in rural areas "lacked information about CCSs and their families". Nurses "continued to collect information about CCSs and their families" by "maintaining regular contacts with CCSs and their families to collect necessary information". However, it was often challenging to maintain regular contact with CCSs and their families. Eventually, such "experiences of many difficulties communicating with both patients and families" made them think that "regular contact with them was something they cannot help with", and discouraged them from trying to establish regular contact, as they "wanted to avoid any conflicts" with CCSs and their families. Despite those challenges, Outpatient nurses were aware of their own role based on the foundation of clinical nursing, namely to "understand CCSs and their families based on health assessment".

[Discussion]

As the CCSs and their families require long-term support, continuous nursing involvement is important. Local outpatient nurses realized the importance of essential care through establishing human relationships from scratch with CCSs and their families despite a shortage of information. The lack of cooperation between nurses at specialized hospitals and local hospitals can cause difficulty in continuing follow-up treatment at local hospitals. We hope inter-hospital cooperation such as information exchange about patients and diseases among nurses will be performed so that CCSs and their families may maintain and improve their quality of life in the near future.

[Key words]

childhood cancer, long-term follow-up, outpatient nurse, childhood cancer survivors, continuous nursing

- 1 論文内容の要旨は、研究目的・研究方法・研究結果・考察・結論等とし、簡潔に日本語で 1,500 字程度に要約すること。併せて英語要旨も日本語要旨と同様に作成すること。
- 2 2 枚目からも外枠だけは必ず付けること。

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	第 <b>83</b> 号	氏名	吉本 康子
論文審査担当者	主査：看護学第二講座教授 今野 美紀 副主査：看護学第一講座教授 大日向輝美 副主査：看護学第三講座教授 吉野 淳一		
<p>論文題名</p> <p style="text-align: center;">小児がんフォローアップ外来における退院後早期の小児がん経験者と 家族への看護師のかかわり</p> <p style="text-align: center;"><b>Nursing for childhood cancer survivors and their families in the early post-discharge period at outpatient follow-up clinics for childhood cancer in local hospitals</b></p> <p>本研究の目的は、小児がんフォローアップ外来における退院後早期の小児がん経験者と家族への看護師のかかわりを明らかにすることである。</p> <p>対象者は通院開始 3 ヶ月以内の小児がん経験者・家族とかかわったことのある外来看護師である。対象者に小児がん経験者・家族へのかかわりに関するインタビューを実施した。分析はインタビュー結果を逐語録とし、内容をサブカテゴリー、カテゴリー化して抽象度を高め、質的帰納的に行なった。分析に際しては担当教員からスーパーバイズを受け、信憑性を高めた。</p> <p>5 名の対象者が得られ、彼らは北海道内の小児がんを治療する病院とは異なる、フォローアップ外来のある病院 4 施設に勤務していた。看護師経験は 5-30 年であった。小児がんフォローアップ外来専任の看護師がいる施設は 2 施設であった。地元病院の外来看護師は、【情報が少ないため、小児がん経験者・家族のことがわからない】状況で小児がん経験者・家族と接していた。そこで、【必要な対応を通して小児がん経験者・家族との接点を持つ】ことから、【小児がん経験者・家族に関する情報収集を継続する】が、通院早期の小児がん経験者・家族とのコミュニケーションは取りにくく【小児がん経験者・家族と話したくても話せない】状況であった。そして、【小児がん経験者・家族ともっと話がしたい】と考えていた。一方で、【小児がん経験者・家族と上手く話ができないのは仕方がない】と考え、【小児がん経験者・家族と問題が起こらないように控えめに対応する】ようになっていた。外来看護師は、【ヘルスアセスメントを通して小児がん経験者・家族の理解を目指す】ことから、小児がんのフォローアップに必要な看護に気づいていた。</p>			

この結果より、地元病院の外来では退院後早期の小児がん経験者・家族に関する情報が不足しており、外来看護師は小児がん経験者・家族とゼロから人間関係を作りながら必要な看護に気づいていた。病院間の看護師同士の小児がん経験者に関する情報交換等の連携がないことは、地元病院で小児がん経験者には不可欠な長期的な継続看護が行いにくい状況であった。今後は病院間の看護師同士が、情報交換や小児がんについて学び合うなどの連携を行い、地元に戻る小児がん経験者・家族の QOL 維持・向上につなげることが望まれた。

審査委員会では、対象となった看護師からのデータの中には、小児がん経験者・家族の退院後早期の経験に限らないものも含まれているのではないかと、質的データのカテゴリー化においてはサブカテゴリーレベルで未整理なものもあるのではという指摘を受けた。患者の退院後早期から始まる看護師の経験を厳格な時期で分離することは困難であり、研究の限界として示し、サブカテゴリーは再度、検討が行われ、整理されたものを確認できた。最終的には、本研究は先行研究がなかった北海道の小児がん経験者・家族に対する地元病院の外来看護経験を、看護師の認識を通じて明らかにした意義ある研究論文と評価された。よって修士（看護学）の学位論文に値するものとして判断した。

※報告番号につきましては、事務局が記入します。